

書 評

ナンシー・K・ストーカー（井上順孝監訳，岩坂彰訳）  
『出口王仁三郎 帝国の時代のカリスマ』  
原書房，2009年6月刊，400頁，3,400円（＋税）

川口 典成

本書は、大本教の布教拡大に多大な貢献をした出口王仁三郎を、「カリスマ的宗教企業家」として捉え、記述・分析した、アメリカのアジア歴史研究家によって書かれた大本教に関する著書である<sup>①</sup>。大本教は1910年代から30年代前半にかけて爆発的に信者の数を増大させ、教団としての組織力を拡大させた日本の「新宗教」である。その成長の原動力の中心に存在していた出口王仁三郎という人物の「企業家」的側面に注目することが本書の大本研究への新たな試みであるといえる。著者は「起業」という要素を、「成長機会を認識し、その機会を生かすために人的、物質的資源を動員し、想定される損益を適切に勘案してリスクを管理する能力」とであると定義しており、新宗教の指導者と一般的な企業家との間の共通点を指摘する。つまり、「成長」「拡大」「新規需要者の獲得」といった目的はどちらにも共通しており、宗教指導者も企業経営者も、自らの活動が「最大利益」をあげるように経営計画を立てることが求められているのである。「大本教が新たな時代状況に適応して瞬く間に影響力を獲得した経緯を分析し、その成功をもたらした王仁三郎の役割を評価すること」が、本書の中心的な課題である、と序章で著者は述べている。

本書の構成は次の通りである。以下では、第一章から第六章までを、それぞれの章ごとに紹介していきたい。王仁三郎が、「いかなる環境に対して、どのように適応したか」ということについて、著者の論点・視点が明確になるように要約していく。序章・結章はまとめの側面が強いため省略する。

序章

- 第一章 出口王仁三郎 少年時代から大本教の指導者となるまで
- 第二章 新国学 神話、政治、農本主義についての大本教の見解
- 第三章 大正心霊主義
- 第四章 自己顕示傾向 布教への視覚的新技術の利用
- 第五章 矛盾する国際主義？ 世界の中の大本教
- 第六章 愛国主義への方向転換と第二次大本事件
- 結章 帝国時代の日本における国家、宗教、伝統

## 第一章 出口王仁三郎一少年時代から大本教の指導者となるまで

第一章は出口王仁三郎の伝記を取り扱う。客観的事実に基づく事実を述べていくというよりは、王仁三郎自身によって書かれた自伝的叙述を用いて構成されており、少年期から大本教のリーダーとなるまでの軌跡が描かれている。宗教指導者の聖人伝にはさまざまな魅力的なエピソードが数多く見られるが、出口王仁三郎もその例外ではない。著者は王仁三郎の「派手で芝居がかった」また「興行的な能力や奇矯な振る舞い」で自らを演出した、そのエンターテイン能力こそ宗教的指導者として民衆をひきつけるための成功への鍵ではないかと述べる。著者は日本の有名な聖人伝や海外の宗教者の自伝と比較することで、王仁三郎のエピソードが、自伝・聖人伝の原型的モデルに共通する多くのものを持っていることを述べる。王仁三郎のエピソードは多くの聖人伝と同じく「受難と迫害」という主題を何度も繰り返すのである。またストーリーは、王仁三郎の自伝を普遍的な主題と結びつけると同時に、自伝の書かれた歴史性・場所性をもつ重要性にも言及している。つまり、王仁三郎の場合、その重要性とは、「明治維新後の近代国家成立の日本」という特異性である。王仁三郎のエピソードには、当時の歴史状況が随所に垣間見られ、明治後期の社会で抑圧された人々の苦難と社会経済的環境の改善への欲求が背景となり織り込まれている。王仁三郎の自叙伝は、典型的な聖人伝に見られる普遍的な主題とともに、明治後期の歴史状況を象徴的に反映する出来事とが絶妙に組み合わせられて成り立っていると言える。

## 第二章 新国学一神話、政治、農本主義についての大本教の見解

1900年代初めから30年代までの大本教において、本流の国学者の名前が具体的にあげられることこそなかったものの、その信仰と活動からは、十八・十九世紀の国学の教えとの連続性が明らかに見て取れる。第二章では、大本教における国学的思想を「新国学」と名づけ、分析する。明治維新によって立ち上がった新政府主導の政治は、十九世紀後半に活躍した国学者たちが夢見た政治の理想＝祭政一致の理念とは異なるものとなっていた。明治政府は官僚主義的な国家を作り上げ、天皇の意見はほとんど政治に反映されず、また、国学者たちが目指した農業中心の理想社会の計画は顧みられなくなっている。そのような政治状況のなか、王仁三郎は、民衆たちの「政治状況への強い不満と農業中心の理想郷への懐古主義的希求」を読み取り、見事な手腕で具体的な活動を行っていく。1908年頃から1918年ごろにかけて大本教が第一次の急成長を遂げた理由は、新国家の政策への不満を抱えた民衆の潜在的欲求を読み取り、「新国学」を布教の中心に据えたことにあると、著者は分析している。具体的な活動として、大本教は、国学の教えの一部を引き継ぎながら、西欧化への反発、国学的な伝統的日本文化観の再主張、「大正維新」を唱えることで、全国的な布教へと乗り出していく。「大正維新」とは主に二つの主張から成り立っている。一つには、税制の改革であり、もう一つには、農業を中心とする自給自足の農村の自律と独立である。どちらの政策にしても、「個々の問題の具体的解決策の提示というよりも、経済的不公平に対する正当な怒りの表現であり、「社会の中から政治構造の悪と不平等を放逐し、正義と道徳性を持ち込もう」という大本教の計画は、大本教の足元には世直し信仰があるということ

示すものだった」と著者は述べている。また、国家イデオロギーと食い違うようなさまざまな計画や提案を、独自の古事記解釈によって正当化させていた。著者の主張によれば、王仁三郎にとって古事記そのものは目的ではなく、手段であった。

### 第三章 大正心霊主義

第三章では、大本教における「心霊主義」が論じられる。大本教は、鎮魂帰神法という方法による病気直しや現世利益の術を行い、民衆の心を捉え人気を得た。この呪術的な心霊主義的实践は第一次大本弾圧へと繋がる契機となる。著者はまず、大本教が大正時代に鎮魂帰神法の推進に成功した理由を三つ挙げる。第一に、大正時代における心霊主義への強い関心、第二に鎮魂帰神法が伝統的な病気直しや霊的实践に繋がる側面があること、第三に大本教のマスメディア利用である。第一の点に関しては、十九世紀後半から二十世紀前半にかけての心霊主義への関心は、日本に限ることではなく、世界的な現象であった。著者は、近代の心霊主義は西洋から始まり、植民地や影響下にある国々に広まったとする世界的な心霊主義ブームの文脈において、日本の現象を捉える視点を提示する。第二の点、明治時代の近代化は、西洋医学こそが正当な治療であるとし、迷信的である伝統的治療—呪術的なアプローチ、お守りや聖水やまじない—の根絶を目指していたが、民衆は相変わらず伝統的治療法による医療を求めている。王仁三郎はその民衆の関心を敏感にかぎ取っていた。また同時に、大本教の心霊主義的实践である鎮魂帰神法は、日本の神道や仏教に根付いた技法に似通っており、民衆にとって馴染みややすい医療方法であった。第三の点、大本教は1917年に雑誌『神霊界』を発行する。編集委員長は東京帝国大学出身で、横須賀の海軍機関学校で教鞭をとっていた英文学者の浅野和三郎である。この雑誌により心霊主義的傾向に関心を持つ多くの信者獲得に成功する。その後、『大本時報』や『大本新聞』など、さまざまな読者層にむけた雑誌をいくつも発行してゆく。以上のような戦略と心霊主義的实践によって布教の拡大に成功した大本教は、1921年に不敬罪と新聞紙法違反により警察により弾圧される。第一次大本事件である。その後、王仁三郎は活動方針の転換を図り、鎮魂帰神法による呪術的な活動に代えて、妨害を受けずに活動を再開するために、より穏当な方法へと切り替えてゆく。「心霊主義的信仰実践を唱導した大本教は、けっして時代に逆行する非合理主義に陥っていたわけではない。むしろ、世界中の産業化社会に見られたまったく近代的な現象の一例だった」と、大本教の現象を世界の近代化の問題と結びつけ、著者は論じている。

### 第四章 自己顕示傾向—布教への視覚的新技術の利用

第四章では、大本教による視覚メディアの利用や王仁三郎の芸術的側面に注目する。著者は、「布教宣伝のために美術展や博覧会、写真や映画といった近代的な視覚的技術を（日本において）初めて積極的に採用したのは、大本教であった」と述べており、救世軍を設立したウィリアム・ブースやプロ野球選手から説教師に転じたビリー・サンディら、十九世紀後半から二十世紀前半にかけてアメリカで独自の伝道・布教を行い、視覚的イメージを積極的に利用した人物たちとの共通点を指摘し、大本教が幅広い層を楽しませるために新しい技術である近代的視覚技術や機械

的複製技術を積極的に利用して、消費者志向の宣伝活動を行ったと論じている。また、大本教は、受け手に応じて利用するメディアを選択しており、それぞれの分野に特化した宣伝活動を行った。「美術作品展では、教団のカリスマ的指導者の多面性とその精神、才能を強調し、芸術を万人が楽しめるものとして提示した。博覧会では、教団の近代性、国際性を強調し、日本という国の枠を超えた教育的、人道主義的団体であるという立場を押し出した。ニュース映画や長編映画では、神道的な儀式や伝統芸術を映像化した」と著者はまとめている。それは、宗教側が信者獲得＝顧客獲得のための宣伝効果の最大化を狙い、新しい社会的文化的条件に創造的に適応したということなのであり、言い換えれば、その適応能力こそがカリスマ的宗教企業家としての才能なのである。

## 第五章 矛盾する国際主義？—世界の中の大本教

大本教は、開祖・出口なおの時代には十九世紀の国学的価値観を持ち、外国（特に西洋の近代文化）を嫌い排外主義路線であったが、王仁三郎は第一次大本事件後の入蒙（モンゴルへの旅）以降、海外への布教を行うようになる。第五章では、大本教における国際主義と、その矛盾を概観する。大本教は国際的な名声の獲得と普遍主義的理想の達成を目指して、主に三つの活動を推進した。第一に普遍言語としての 에스ペラント語の普及に尽力したこと。第二に非主流の宗教との積極的な接触を試みたこと（たとえば、中国の道徳的組織である道院や、バハイ教、ヨーロッパの心霊主義組織など）。第三に、宗教色を排した人類愛善会（ULBA）を設立して、人道的活動を通して海外で積極的な活動を行った。大本教がこれらの国際主義を示した、第一次世界大戦直後の 1920 年代前半は、国際連盟の設立に象徴されるように世界各地で国際主義的理想が広まった時期であった。平和への楽観主義的雰囲気、布教に可能性を開くことを見て取った王仁三郎は、国際的な立場を築くことで、国内においては正当な宗教としての立場を示し、国外においては国際協調路線の団体としての立場を固めることを目指したと著者は指摘している。だが、同時に、王仁三郎が主導した大本教の国際主義には限界・矛盾が存在していた。つまり、王仁三郎は国際的な関心を地域的・国内的な関心を通してしか理解することができず、日本を中心として考える拡張主義・帝国主義的イデオロギーを持ち合わせていたのである。大本教が国際活動と愛国主義を同時に抱えたという事実から、ナショナリズムと国際主義は互いに「相容れない価値観」ではなく、「相互に強化し合う存在」である、という洞察を得ることができると著者は述べている。

## 第六章 愛国主義への方向転換と第二次大本事件

第五章の要点で言及したように、大本教の「国際主義」は愛国主義を内側に抱えていた。そのため、日本社会にナショナリズム的愛国主義の気分が高まると、その社会の潮流に対応しながら、大本教の活動の焦点も再び世界から日本へと移っていく。王仁三郎は広まりつつある愛国主義や日本の満州政策への民衆の支持を背景に、「皇道大本」へと名称を変更、また、非宗教的組織である「昭和神聖会」を設立する。「皇道大本」という名前は、当時では、右翼的主張によって天

皇との強い結びつきをイメージさせる言葉であった。「人類愛善会」の国内版とでも言うべき「昭和神聖会」は、宗教団体でも政治団体でもないと自称していたが、政治家・役人・愛国団体などと非常に濃いネットワークを持っており、王仁三郎は組織の先頭に立つことで、一般の民衆の眼に映る姿を宗教家から政治家へと変貌させるのである。以上のように大本教が愛国主義へと舵を切ると、体制側は大本教の組織力を恐れ、教団への警戒を強めることとなり、そのことが 1935 年の第二次大本事件へと繋がっていく。大本教は治安維持法違反により摘発され、大本教施設の多くが破壊される。村上重良を引用しながら、著者は「王仁三郎は自分の若い頃以降の時代の変化がどれほど大きかったかを十分に認識できていなかった」と述べる。つまり、王仁三郎の青年時代には日本の国家も同時に「青年時代」であり、個人が社会を変革できる余地があった。しかしながら、1930 年代、中央集権の進んだ帝国主義的強国へと日本は成長し、国民が国を救える可能性は少なくなっており、また、専制的体制にとって一線を越えて政治活動に足を踏み入れる宗教は異端とみなされ容認されない、ということである。逮捕され拘置されていた間、また、裁判の間も、王仁三郎は楽天的だったといわれている。1942 年に無罪となり釈放された王仁三郎は亀岡郊外の小さな農業に戻り静かな余生を送り、1948 年に息を引き取る。

以上が、本書の各章の要約となる。基本的な著者の視点は、次のようにまとめることが可能であろう。王仁三郎は明治新政府の政治によって社会的・経済的に苦しんでいる民衆の潜在的な欲求を鋭くかぎわけ、新しいテクノロジーやマスメディアをその都度利用しながら、伝統的な文化形式に基づいた愛国的で国学的なアイデンティティを主張すると同時に、普遍主義的な国際主義をも主張した。時代の宗教的・精神的な需要を見極め、民衆の心を掴み、巨大で多面的な宗教複合組織を作り上げたのである。

巻末の監訳者の解説に次のように書かれている。「本書はむろんこうした研究（引用者注：大本教研究におけるの必読文献）を踏まえているが、外国人として日本の宗教文化と格闘しながら書かれたものであるので、かえって分かりやすい大本の紹介にもなっている面がある」。監訳者が指摘するとおり、たしかにこの著書を読み通すことで、大本教に関する一連の流れは理解することができるし、最適の入門書といえるだろう。だが、「入門書」の趣をもち、世界的な文脈を導入した幅広い視点からの分析であるがゆえの問題点も存在しているように評者には思われる。以下では、「企業家という観点からの記述の不徹底」「宗教学の根本問題たる『カリスマ』メカニズム分析の不徹底」という二つの観点から本書を批判・検討してみたい。

第一の点は、企業家という観点からの記述の不徹底についてである。本書は、宗教団体の研究に「カリスマ的宗教企業家 (charismatic entrepreneur)」というタームを導入し、大本教の爆発的な拡大をもたらした原動力を研究しようという試みであり、著者であるナンシー・K・ストーカーは「起業」という概念についてまず経済学者による定義を利用することで、この研究を始めている。宗教学において、ひとびとの心の動きや精神的活動という、その実質が見えにくい分野を、経済学の概念を導入することによって可視化していこうということが、ストーカーの意図であったと考えられる。経済学の方法を利用して、宗教団体指導者の活動を分析することは確かに宗教

学に新たな視点を提供する有効なアプローチである。しかしながら、本書の記述・分析のありかたは、最初に引用される経済学の定義に準じて書かれているわけではなく、様々な要素を散りばめながら進んでいくために、王仁三郎が「起業家」として「最大利益」をあげるため、また「リスク管理」のために具体的にどのような選択肢を想像し、どのような基準に基づき戦略を実行したかということが明確にはならない。もちろん、著者は様々なデータ収集を丹念に行い、大本教の活動戦略がどのような影響を与えていたか、新聞記事の引用や入信者増減の数字データを各所に記載し、その努力と成果は見られる。だが、そのデータ自体が明確な輪郭線を描くことはないように思われる。つまり、各章の要約で示したように、本書の記述・分析のありかたでは、王仁三郎がどのような環境に対してどのように行動したか、という単線的な相互・因果関係は読み取れるのだが、おそらく「企業家」に不可欠な複数の選択肢のなかから「リスク管理」「最大利益」を考え戦略をとった姿は見当たらないのである。そのような理由も含め、たとえば、映画での布教方法が、明確な戦略であったというよりは、王仁三郎の個人的嗜好と密着した、いってしまえば「趣味」から派生したものであると結論付ける可能性は、ストーリーの立論によっては排除することが出来ない。もちろん、政策・戦略に指導者個人の嗜好が反映されてはいけないということではないが、本書の課題から察するに、具体的にどのような意識のもとにその活動が行われたのか、また、実際にその政策・戦略がどの程度有効に機能したか、ということを緻密に腑分けして分析し論ずる必要があると思われる。また、著者が集めたデータに関しては、信者数の増減やそれに付随する政策などを表やグラフのかたちでまとめるだけでも、著者の収集したデータが読者にも説得力をもって機能したのではないかと思われる。

第二の点は、「いったいなにが、かくも大本教を魅力的にみせているのか？」という問いである。たとえば、いまこの著書を読み終わった感想を、と問われた読者は、大本教の創始者である出口王仁三郎の魅力の一端を垣間見ることができた、と答えるだろう。あらゆる分野に精通し、時代に応じて民衆の不満や欲求を嗅ぎ分け、明確かつ的確なプランを、大胆かつ余裕を持って実行していくカリスマ的経営者の姿は、確かに魅力的である。

だが、オウム真理教に関しても、同じような記述を行うことが可能（だったの）ではないか。オウム真理教は周知のとおり、1995年に地下鉄サリン事件を起こし、犯罪行為を起こした宗教団体として社会的批判・制裁を受け、いまに至っている（現在では「Aleph」と「ひかりの輪」という二団体へと分裂している）。一方、大本教は第二次大本教事件以前、1930年ごろから「愛国主義団体」としての側面を強めていた。国家による大本教弾圧が起こらなければ、教団が戦争になにかしらの形で関わり、そうであれば、現在において「危険団体」として認識されているだろうことは明白であろう。本書では、第二次大本教事件に関して、大本教が理不尽な弾圧を受けたという記述内容となっているように思われる。たとえば、「当局は隠匿武器も革命の証拠も見つけることができなかった。捜索を正当化するため、当局は曖昧な証拠を提示し、大本教に敵意を抱くマスメディアは喜んでそれを大衆に伝えた」というような記述が続く<sup>2)</sup>。

ここでは「戦争に加担することのなかった大本教」という記述の方向性が、オルタナティブ思想として大本教という宗教団体を魅力的に見せる機能を果たしている。出口王仁三郎のロマン主義的思いとカリスマ的企業家としての側面が融合し、一時は戦争への加担へと舵を切っていた大

本教の、その教団の中心人物の「カリスマ的企業家」という魅力的な側面を拡大して捉えてよいのだろうか。本書からは、王仁三郎の「カリスマ的企業家」としての戦略の才能を感じることはできるが、まさにその才能によって、大本教の思想が、大衆迎合的であることの危険性には著者は意識的でないように思われる。ここにおいてストーカーは「カリスマ」の内実、メカニズムを分析するという宗教学研究者の職責を放棄し、自らもまた大本教の「カリスマ」に魅了され、その広告塔としての役割を演じるに至っている。

ストーカーに見られたような、大本教をオルタナティブ思想として捉える論調は、例えば日本思想史学者の安丸良夫によっても共有されている。安丸は第二次大本事件について次のような記述をしている。「(第二次大本弾圧事件は) 天皇制国家の正統的神話や国家意思と、民衆的な変革思想としての大本教教義とを、はっきり区別させる機会となったはずである<sup>(3)</sup>」。つまり安丸は大本教に「国家権力に対する私たち(引用者注: 民衆)の自立」の問題としてのオルタナティブ思想の可能性を見出しているが、「大本教団は天皇制ファシズムの戦争政策の一端を担う運命をまぬかれ」る契機となる第二次大本教事件の重要性も指摘している。つまり、大本教を研究対象として扱う際には、大本弾圧を研究者がどのように評価するかという問題は極めて重要であり、安丸は大本教を「オルタナティブ思想」として捉える際には、研究者が大本弾圧事件に対する立場を明らかにしなければならない、ということに明らかに自覚的である。だが一方で、本書にしても安丸にしても、大本教に寄り添った評価を下しているように評者には思われる。どちらも大本教をオルタナティブ思想として捉え、国家権力に対峙した宗教思想として把握しているが、果たしてそれは正しいか。もし王仁三郎が本書の著者がいうように「カリスマ的宗教起業家」だと仮定すると、民衆の「国家への対峙・反抗姿勢」の欲求を嗅ぎ取り、民衆に寄り添い「国家への反抗」を行っていたことになる。それは「民衆思想」への適応であり、国家に従属した形での「民衆」思想であり、大本教の思想自体が国家に対峙して生み出す「民衆思想」であるとはいえなくなる。つまり問題は、王仁三郎にとって「国家権力に対する自立」の問題が一次的に重要な事柄だったか、ということである。王仁三郎が、大衆迎合的側面があったゆえに、国家権力と「対峙」するのではなく、「適応」してしまう危険性があったとみるのもひとつの視点ではないか、と評者には思われる。むしろ、そのような視点からこの著書を振り返ると、個人の強い思い—誇大妄想的な趣味嗜好—と時代の変動期における民衆の不安が短絡的に直結することの恐怖と危機感を強く感じるのであり、大本教の指導者である出口王仁三郎の思想も、戦争協力へと突き進む可能性を十二分にもっていたという危機感をもって受け止めねばならないと評者には思われる。この点は、近代宗教学研究と大衆社会論との接点として、宗教学分野における極めて重要な論点を構成するはずであるが、本書においては自覚的に論じられていない。

最後に、王仁三郎の「かっこ良さ」、つまりは様々な問題を孕んだ存在である「カリスマ的宗教起業家」としての王仁三郎について短く書いてみたい。「大本教の拡大には、カリスマ的リーダーシップと企業的な側面の双方が不可欠なのである」と序章で著者は述べている。上記の批判・検討で双方の論点を取り上げたが、もちろん双方は切り離せるものではなく、両者が渾然一体となっている。王仁三郎の「派手で芝居がかった」また「興行的な能力や奇矯な振る舞い」で自ら

を演出する、そのエンターテイン能力があつてこそ、「企業家」出口王仁三郎が宗教的指導者として布教拡大に成功した鍵なのである。「神学や教義よりも布教の実践と方法に注目」したことで王仁三郎の本質＝エンターテインメント能力が存分に示された著書となっていることは間違いない。著者は最後に、サイドの言葉を参考にしながら「日本宗教の研究は、……人間に対する興味よりも国に対する問いによって進められてきた」と書き、サイドの言葉をこう引用する。「私たちがほかの文化や宗教と出会うとき、最良の進め方は、自分や他人の生活を形作っている個人的経験を思い出し、それに基づいて行動することである」と。この引用で本書を閉じた著者の思いは、おそらくこうも言えるのかもしれない、と思える。出口王仁三郎を、「国家に対峙するオルタナティブ思想家」としてだけ捉えるのでもなく、「愛国主義に傾倒した宗教家」としてだけ読み取るのでもなく、ましてや「大本教の王仁三郎」に押し込めるのでもなく、王仁三郎そのものに向かうことを願うと。つまり、宗教の教義のみを対象とするような「古典的」・「神学的」宗教研究に限定されない、純粋に「宗教的」ではないかも知れない宗教家の具体的実践や生活をも含み込んだ宗教研究の可能性をこそ、この著書は示唆している。

## 註

- (1) 「カリスマ的宗教企業家」という語は「原書では *charismatic entrepreneur* と表現されている。『カリスマ的企業家』となるが、一般の企業家の比喩を宗教者に適用しているわけなので、……カリスマ的宗教企業家という訳語をあて」と、巻末の監訳者による解説に記されている。
- (2) ここでは大本教事件が法治国家における正当な処分であったかどうかということとはひとまず問わない。ここで重要なことは、大本教弾圧が正当であったか不当であったか、ということと、大本教の思想の是非はまったく別の事柄であるということである。もちろん、大本教弾圧事件を擁護しているわけではない。
- (3) 安丸良夫「出口王仁三郎の思想」『日本ナショナリズムの前夜』洋泉社、2007年。